

■ みずつち座談会 第3回 新潟アート「過去と現在そして未来へ」

出演：前山忠（本芸術祭 市民プロジェクト参加作家・新潟現代美術家集団 GUN メンバー）

堀川紀夫（新潟現代美術家集団 GUN メンバー）

佐藤秀治（新潟現代美術家集団 GUN メンバー）

関根哲男（本芸術祭参加作家・新潟現代美術家集団 GUN メンバー）

進行：大倉宏（美術評論家）

日時：平成 27 年 9 月 12 日（土）午後 2 時 00 分～

会場：ベースキャンプ 3 階特別活動室



（大 倉）

今、新潟県では二つの大きな芸術祭が開催されています。十日町周辺の第6回目の「大地の芸術祭」、新潟市での第3回目となる「水と土の芸術祭」です。新潟でこのような最先端のアーティストが参加するイベントが催されるようになるとはまだ想像もつかなかった時代、約50年前の1960年代半ばに、今から見ても驚愕するような活動をされていた人たちがいま

す。皆さん、お生まれが1940年。戦争が終わる前後に生まれた世代で、今、恐らく70歳前後でいらっしゃると思いますが、当時は20代でした。その人たちが、グループで、あるいは個々に活動し、その活動が新潟の「GUN」という名前で新潟県外にも同時に広く知られていました。GUNの活動は1975年くらいまでで、一応、終わっています。私は1985年に新潟に来たので、直接その活動は知らないのですが、GUNのメンバーだった4人の方、特に関根さん、前山さん、堀川さんの新潟でのさまざまな発表に接したとき、この人たちが以前GUNというグループで活動していたという話を聞きました。

この芸術祭は、第2回から美術をめぐるトークを行なってきました。前回は現代の芸術祭的なイベントをさまざまな角度から考えるものでした。〈新潟の美術〉を振り返る催しは、今回が初めてだと思います。中でもGUNの存在、今の「大地の芸術祭」や「水と土の芸術祭」を考えると、かつてのGUNの活動が一体どんなものだったのかを振り返ってみるのは、とても大きな意味があるし、また改めて、いろいろなことを感じるのではないかと改めて、今日はお話を聞くのを楽しみにしてきました。

ご紹介します。左から堀川紀夫さん、前山忠さん、佐藤秀治さん、関根哲男さんです。映像なども見ながら、GUNとは何だったのか、どんな活動をしたのか、4人にお話をいただき、その後、会場の皆さんともやり取りをしたいと思います。

それではまず、GUNの始まりについて、どのような時代に、何を思っただけでスタートしたのかを、お話ししたいと思います。

前山さんが最初の出発点をお作りになった、と聞きました。多分、前山さんは新潟大学、当時、新潟校と上越校があって、上越に芸能科があり、その学生で、その学生時代の行動から、GUNがスタートしたようです。まず前山さんにその辺からお話いただいて、順次皆さんにお聞きしたいと思います。

(前山)

前山です。新潟大学は新潟の本校に対して、長岡分校、高田分校と3か所に分かれていました。それぞれの科も随分、分散していたので、よく「たこ足大学」と言われていたわけです。高田には、芸能科という特異な存在がありました。いわゆる教員養成で、小学校科、中高科、普通教科は2年間を高田で終わると新潟本校で後期の2年間を過ごします。芸能科だけは4年間、高田にいられました。私の所属していた芸能科絵画科は、油絵です。そのほかに彫塑科、日本画、書道科、ほかに体育科、音楽科とありまして、全国的にも非常に特異であったと思います。書道科は、その当時、全国で2校くらいしかないと聞いていました。

この画像は堀川さんと、右側にいるのは赤塚行雄という、今はもう亡くなられた美術評論家です。石子順造など新しい評論家で、その当時、御三家と言われた針生一郎や中原佑介、

東野芳明らと年齢的にはそんなに差がないのですが、その次の世代の評論家と言われていた人たちです。

大学では自由にやりたいことをやらせてもらえる気風がありました。随分、自由にやらせてもらったと感謝しています。今のように、あまり管理が厳しくなく、出品作が間に合わないと、泊まりがけでやっても文句は言われなし、夜10時までは開放でした。ですから、朝から夕方、あるいは夜まで自由に自分たちの教室で制作ができた時代でした。教授もときたま回ってきて見る程度でしたから随分気楽でした。今、画像が出ているのは、ポップアート調の作品で、大学4年の卒業制作です。当時、不二サッシが一番大手で、これがどんどん昔のウィンドウに代わって登場したときで、裏側からは内鍵がかけられます。これが3層になっていて、同じセットが一重、二重、三重の窓になっています。真ん中だけガラスを残して、周りの色を塗って、先ほどの作品ができています。次の画像は、鏡の作品です。鏡を削り、片方をガラスにしたのです。右は、おぎくぼ画廊¹の三浦早苗さんだと思います。

大学の同級生に現代美術を、論じ合う仲間がいたことが、非常に重要なところで、私もそこで随分、鍛えられました。四六時中使っているいい教室にいたからこそ、そういう話のできたのだと思います。東京に出かけて、いろいろな美術情報や作品展を見ることで、自分の視野も広がり、また現代美術はここが刺激的でおもしろいとなると、どんどん新しいものを考えていきました。若気の至りもあり、やりたい放題やったと思います。校風が緩く学外発表も自由だったので、私は大学4年の春に初めて学外（東京）で個展²をやりました。後にも先にも、その当時、学生時代に個展をやったのは新潟大学ではほとんどなかったと思います。そこで知り合った評論家の赤塚さんを高田に呼んできて、俺たち仲間でこんな展覧会をやるから、講演を、批評をしてくれということから、今のGUNの前身に当たる母体が形成されました。作風としては、ポップアート、抽象絵画的なもの、あるいはオブジェ、アースワーク、コンセプトチュアルなもの。その当時、電気仕掛けからキネティックアートまで、めまぐるしく混在していました。だれが一番新しいことをやるか、みんなが競いあっていた時代です。私たちもメニューが変わるごとに、新しいものに飛びついていました。そのような大学時代の雰囲気現代美術に接近させたということだと思います。

（堀 川）

ときどき合いの手を入れるような形で参加させてもらいます。お手元に「新潟現代美術家集団GUNの歩み」という資料がありますよね。1967年から始まっています。1964年に東京

¹ おぎくぼ画廊 1963年荻窪駅南口に開廊。中原佑介らを選出した美術家に「おぎくぼ画廊賞」を授与したほか、機関誌「眼」を発行。オルタナティブな言論空間をつくりあげた。

² 「前山忠個展」ルナミ画廊（銀座）1966

オリンピックが開催され、新潟は国体や地震があったり、非常に激動した、また高度経済成長を実感するような時代でした。新幹線が通り、首都高速が通り、日本はこんなによくなったのだと単純に思えた時代です。そんな中で、前山さんが、個展をするなど、当時としては非常に珍くて凄いなと思うような動きをしたのです。そして、先ほどの赤塚さんや石子さんなどいろいろな方と知り合い、刺激を受けて帰ってくる。僕は1年下ですが、彼の誘いにより、ついていくことになるのです。これが1967年、ルナミ画廊で2回目の個展で鏡の作品です（図1）。



図1 前山忠 第2回個展 ルナミ画廊 1967

(大 倉)

前山さん、これはまだ学生のころですね？

(前 山)

これは卒業してすぐです。

(堀 川)

いきなりこの画像が出てきましたが、それまで準備委員の会合なども持ったりして、1967年12月の8日か9日の夕刻だと思うのですが、GUNの展覧会をやるということで、デモといいますが、今でいうパフォーマンスをしなければならないということになりました。寝転がっているのが前山さん、ポスターを持っているのが私です。この後、ちょっとした事件が

起こります。左右はささっと逃げたのですが、私はポスターで顔を隠していたので、警察官が来たのを気づかず、駅前まで引っ張っていかれました。そういうことがあったりして発足するわけです。

これは当時のGUN展の発足展³で、吉田武さん、これが小松弘忠さんです。あまりしつかりとした記録写真を撮っていないのです。

(大 倉)

会場はどこですか。

(堀 川)

長岡文化会館の3階です。

(大 倉)

長岡現代美術館⁴のあった建物の3階ですね。

(堀 川)

とにかくオープニングのデモとしてこういうことをしているわけです。これはシンポジウムです(図2)。鈴木慶則、木村恒久、100歳まで生きた丸山正三先生、みんな亡くなりました、石子順造。それからまだ生きている、前山。刀根康尚、こちらにも亡くなりましたが、松本百司。

発言自体をきちんとメモした人はいないのですが、おぎくぼ画廊の機関紙「眼」に報告が残っています。そういうものをできるだけまとめたものに『GUNの軌跡』⁵があります。画像は木村恒久さんが力説しているところです。



図2 GUN創立展覧会 シンポジウム

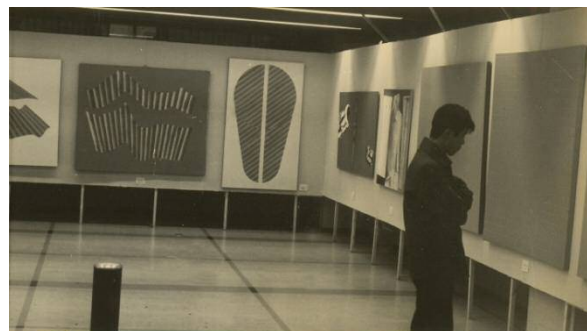


図3 GUN創立展覧会 ※いずれも長岡文化会館 1967

³ 「GUN展(GUN創立展覧会)」長岡文化会館(長岡)1967.12.9-10 シンポジウム:テーマ「芸術運動はどうあるべきか—GUNのゆくえ—」1967.12.10

⁴ 長岡市にあった私設美術館。1964年に開館し、日本で初めて館名に「現代美術」を用いた美術館。1979年に閉館し、現在は長岡商工会議所美術文化ホールとなっている。

⁵ 『新潟現代美術家集団GUNの軌跡 1967-1975』 2008年発行

(大 倉)

当時の60年代の新潟の美術状況としては、大学の先生方も含めてそうだったのではないかと思います。美術といえば絵を描く、あるいは彫刻を作る。そして発表といえば、東京の団体展に出品をするというのが主流な中で、学生の前山さんは、そういう仕方ではなく発表される美術、後に現代美術と言われるようなものが始まっていたわけですが、新幹線もなかった時代に、今よりもかなり時間をかけて東京に行き、その情報を大学に持ち帰ってきたということですね。前山さんの学年だけが、特にそういうことに熱心な話をする人たちが集まっていた。1年下に堀川さんがいた。そして、GUNの結成になるわけですが、名称を含めて、どのような形でグループになったのですか。

(前 山)

結成前は、長岡現代美術館が、我々に非常に大きな一つのインパクトを与えたということです。世界の最先端の作品を目の当たりにできるということ、これはある意味、全国的に見ても、恵まれた環境であったと思います。現代美術館という名前のついたものは全国で初めてなわけです。1964年に開館で、私がちょうど大学の2年だったでしょうか。若いから刺激をもろに浴びて、将来はそこで自分も展示したいと、一つの夢につながったと思います。

その入口のわきに5、6人も入ると満席になる小さな喫茶室があったのです。そこに僕らは集まって、小さな作品を持ち寄って、講評しあったり、東京からの情報を交換したりして、私が呼びかけ人といいますか、メッセージを發して、「新潟現代美術家集団GUN」を作ろうということになりました。そのときに名前は、まだ決まっていなかったのです。私の記憶では、東京に行く汽車の中で、何かカッコいい名前をつけようということで、いろいろ考えたのですけれども、例えば、新潟県なら米（こめ）がいいとか、米（べい）とか、何かダサイので、もっとパンチのある言葉はないのか。ガンとしたものはないのか、結局そのガンがいいのではないかという話になったのです。「ガン」や「がん」ではカッコつかないので、やはり横文字でしょうということで、みんなが集まったときに、何だかんだ意味づけをして、「新潟現代美術家集団GUN」となりました。「現代美術」という言葉は、そのとき、長岡現代美術館がありましたから、それをやはり踏襲したわけです。一般的には「前衛美術」という言葉のほうが、とおりがよかったわけです。でも、市民権を得はじめた現代美術としました。今日、現代美術といえば、古い言葉にすら聞こえるくらい当たり前になりましたよね。そういったことです。

(堀 川)

創立展の会場風景の写真⁶を拡大してみると分かったのですが、これは長谷部昇さんです。これは亡くなった小栗強司という高校の先生で2、3回、一緒にやりました。これが多分、市橋哲夫さんだと思います。ほかの方は分かりませんが、この作品は市橋さんの作品です。

(大 倉)

補足しますと、長岡現代美術館は、前山さんからお話がありましたように、1964年、長岡市にできた日本で初めての現代美術という、「現代」という言葉を冠した美術館でした。公立ではなくて、当時、大光相互銀行の社長だった駒形十吉さんが、東京画廊とのつながりを通じて、日本及び海外の20世紀の美術を収集され、それをメインの展示品とした現代美術館でした。今も建物は長岡駅のすぐ近くにあります。その開館が、ちょうど前山さんが2年生のとき。その衝撃がやはり大きかったのですね。そこは、所蔵品だけではなく、「長岡現代美術館賞展」⁷というのがあるって、日本の現代美術家の優れた人たちに大賞を与えるということを何年かして、それは相当な衝撃を美術家たちに与えたのではないかと思います。

(堀 川)

「長岡現代美術館賞展」というのは1回目は日本だけだったのですが、外国の作家とタイアップさせる形で、若い向こうの作家たち、こちらも若い代表みたいな方たちが出て、私の記憶ですと、東京の頭越しにアメリカの現代美術がいきなりで、アンディ・ウォーホルを初めて見たのは長岡です。「ジャッキー」という、ケネディーが暗殺された直後のオナシス夫人の作品があります。

GUNが12月に長岡で展覧会をして、その勢いで10日後の21日から1週間、東京のギャラリー新宿で展覧会をします。これが私で、前山さんの作品のところで写真を撮っています。このときに毎日新聞の全国版で取り上げられています。これが、前山さんの作品だから、やってよかったという感覚を持ったのですが、いかがですか。

(前 山)

当時は、やりたいことをやったという感じですね。まずは新潟と東京で同時開催しよう。つまり私は農家の出身で長男で、はじめから東京に出ることに親から許しを得られなかったので、そういう面では、よし新潟でやるという覚悟もありました。ただし東京に頻繁に行っていましたから、東京に殴り込みをかける、東京で得たものを新潟にまた根づかせるという願望があったと思います。

(堀 川)

⁶ 註釈5の『新潟現代美術家集団GUNの軌跡 1967-1975』17P左下の写真

⁷ 現代美術の推進に積極的に寄与することを念頭として設けられた賞で、国内外の新進美術家を選抜招待し、公開審査で賞を決定。当時の美術界から大いに注目を集めるが、1968年5回で終了。

だから、この鏡の作品など、今でも斬新に見えますよね。

(大 倉)

これは堀川さんですか。

(堀 川)

22歳くらいのときです。ポリエステルでオブジェを作ったのですが、一応、ライトアートです。東京や長岡で最新の動向にふれ、戻ってきて、何かやらなければいけないということで、こういうことをやるのです。

(前 山)

これは新潟の古町です(図4)。パフォーマンスという言葉がありますが、当時はハプニングと言っていました。つまり何が起きるか分からないということです。十何人でまず1人が1人を縛ります。アーケードの下の柱に縛っていったわけです。残った人間がまた2人1組になって、1人をまた縛ると。したがって、最後に残るのは、1人、自分で自分をしばれませんので。



図4 GUN街頭ハプニング 新潟市古町 1968.1.15

(堀 川)

最後に残ったのは前山さんだけだったのですか。

(前 山)

最後ではなく、自分も縛られて1時間くらいは立っていたと思います。雪の降る中でしたから寒かった記憶があります。

(堀 川)

これは1月の十何日なんですよ。東京から帰ってきてやったことは、こういうことなのです。

(前 山)

みんな首をうなだれて、サングラスをしていますから、周りの人間の様子を少しは覗けたのですが、いわゆるダイ・イン、デモや何かのときに、ベトナム反戦の行動として、ダイ・インといって地面に死体のように這いつくばったもののイメージが片隅にあったと思います。

(堀 川)

この画像はその後で、上越のスタジオで、BSNのテレビ⁸に出演しました。前山さん、私、小野川三雄さん、小栗強司さん。これは大池幸一郎君、モデルで出てもらった。

(大 倉)

サングラスしているのは、大体、こういうパターンでやっていたのですか。

(前 山)

あとはマントを着ていた。これが重要なのです。“雪国新潟のGUNだ”というトレードマークですね。

(堀 川)

それぞれの行為がどのようなことであったかということは、それぞれに意図があったと思います。それから4月に大島画廊で展覧会⁹をやります。このときは、13人、花見のハプニングをやるということで、包帯を巻いて顔を隠すのです。

(前 山)

シャツにサイケデリックな模様をつけて、戸板みたいなものに包帯人間を乗せて、これは名前もみんな入っているわけです。花見会場を大島画廊から出発して練り歩いたのです。黒山の人だかりになって、身動きならないくらいでした。その当時の現代美術など、あまり一般的な言葉ではありませんし、はっきり言って奇人変人扱いされました。

(大 倉)

古町でのハプニング、それから上越での発表。また、東京でということですね。

(堀 川)

⁸ ハプニング・ショー (BSNテレビ) 1968. 1. 18

⁹ 「GUN展」大島画廊 (高田) 1968. 4. 13-14 高田公園花見会場でのハプニング 1968. 4. 13

東京の前に長岡の文化センターでまたやる¹⁰のです。これがそのときのメンバーです。美術評論家の岡田隆彦さん、田中信太郎さん。このとき、ものすごくお金がかかった記憶があります。前山さん、小島信明さん、これが関根伸夫です。こういったものすごい若手のトレンドスターたちを呼んだのですが、私らの出品料も半端じゃなかった。今でもものすごく高いと思うくらいの額ですからね。私の記憶だと、その当時の月給に値するような負担金があつて、なぜそんなエネルギーがあつたのかと今、思いますね。だから、これが終わって、次の9月の椿近代画廊¹¹までいくと、人数が少なくなってきました。

(前 山)

もう息切れしたんだよね。

(堀 川)

この画像は、1969年、次の年です。これは前山さんで、これが前田常作先生なのです。あとは全部、糸魚川の作家です。これはもう亡くなっていますけれども藤巻邦彦さん、糸魚川の市展にすばらしい当時の若手のアーティストや作家や評論家を呼ぶんですよ。前田さんが二度来たり、大岡信さんや岡田隆彦さんが来たりしました。記念にハプニングをやるということで、海岸に出て、流木をみんなで運んだのです。これは記念すべきものがあつたように思っています。四十何年前ですからみんな若いのですよ。前田先生がリードして、よいしょと上げています。これは前田先生とGUNを結ぶエピソードの一つです。

(前 山)

次の画像は1970年4月ですね。横浜のこどもの国でやった野外展¹²に参加したものです。反戦旗を地面に置いて、石ころで風で飛ばないようにしただけです。それを背中に羽織って練り歩いたのが下のパフォーマンスです。

(堀 川)

これは71年くらいになっています。お互いにメールアートをやり取りするのですが、ここに佐藤さん。これはヨシダ・ヨシエさんが取材に来たときに、前山さんのいる須原¹³まで出かけていったのです。いろいろなメールアート作品があります。万博の後、これは三島由紀夫さんが自殺した後に佐藤さんが作ったのだと思うのですが。

(大 倉)

時代背景としては、かなり学生運動が盛んだった時代ですよ。一方で70年に大阪万博が

¹⁰ 「存在への思考」展 長岡文化会館（長岡）1968.8.8-11 シンポジウム：テーマ「何が可能か—存在へのアプローチ」1968.8.11

¹¹ 「GUN展」椿近代画廊（新宿）1968.9.7-12

¹² 「現代美術野外フェスティバル」こどもの国（横浜）1970.4.1-5.31

¹³ 新潟県魚沼市須原

開かれて、高度成長がますます右肩上がりになっていく時代でした。三島由紀夫の自決もあのころですよ。

今、GUNのスタートの時分のお話いただきました。初期には東京から評論家や美術家を呼んで催しを開いたり、長岡、上越、東京での発表があり、古町でのハプニングもありました。ハプニングというものも、60年代に東京では読売アンデパンダン展という全く無審査の展覧会が開かれていて、そこはかなり普通の絵画ではないような、反芸術と言われる表現が非常に増えていき、それがあまりにもめっちゃめっちゃになってしまって中止になった後、その出品者達が路上に出て行って、前山さんたちが言われたようなハプニング、行為そのものを芸術的表現として行うようになっていった時代です。有名になったのは、赤瀬川原平さんや高松次郎さんたちのハイレッド・センターですけど、それに並行するような活動を初期のGUNはやっていたわけです。そのGUNが注目されるきっかけとなったパフォーマンスがありました。これは1970年ですか。

(堀 川)

70年に「雪のイメージを変えるイベント」というものをやりました。その後、佐藤さんや関根さんと出会うのです。

(大 倉)

「雪のイメージを変えるイベント」について、ご存じない方も多いと思いますので、どんなイベントだったのか紹介していただけないでしょうか。

(前 山)

信濃川の河川敷で顔料を撒いた。これが当時のアサヒグラフの表紙とグラビアで特集が組まれたので、一挙に全国に知られることになりました。全然面識のない人が、大阪あたりから、GUNのメンバーにぜひ会いたいと来たり、手紙をもらったり、いろいろなつながりもできました。発案はそれぞれがいろいろな論議をしながら練り上げていったのですが、直接的には羽永光利さんというカメラマンがいろいろな手配をしてくれて実現したものなのです。当時としては、大イベントだとか、あまり自覚していませんでした。振り返ってみると、雪というマイナスイメージしかなかったものを、積極的に一つの素材として格闘し見せるということでは、後から時間が経てば経つほど、雪アートの一つの原点として見なされるようになったというところがあります。また、そこから波及して、いろいろなパフォーマンスや雪アートも展開されるようになりました。そういった意味で、今から45年前に行ったことが、全然自覚的ではなかったのですが、こんなに大ごとになるろうとは、と今は思っております。



図5 「雪のイメージを変えるイベント」十日町市信濃川原 1970 Photo by Hanaga Mitsutoshi

(大 倉)

GUNの方々が当時行った活動の一つだったということですよね。

(堀 川)

そうですね。集大成とか、あまりそういう意識はなくて、やれたなという感じです。雑誌や何かに載って、一旦区切りがついたような感じでした。

(大 倉)

それが70年ですね。

(堀 川)

70年の2月です。3月とか、4月には雑誌に載って、GUNという名前が全国に伝わったように聞いています。

(大 倉)

GUNというと、新潟県の美術家集団なのですが、私のイメージだと、上越とか長岡とか、同じ新潟県の中でも、新潟市よりは、ずっと南の方のイメージが強い。これはこの雪のイメージのイベントのせいもあるかもしれません。前山さんも、堀川さんも、新潟大学の上越校でそこが発信だったということもあります。今、お話しになっていた羽永光利さんは、60年代から日本のさまざまな地域で現代美術と言われた人たちの映像を撮り続けた写真家です。その方とのつながりで、このイベントが実現したということでしたが、具体的には、色の粉の入手とか、そういうことですか。どこから大量の色の粉を入手されたのでしょうか。

(堀 川)

大日精化です。僕らはカラープランニングセンターという名前がインプットされています。

羽永さんとの付き合いは、たまたま羽永さんが、別の仕事で十日町とか新潟市周辺に取材で来たのです。彼とはその前に東京で展覧会をしたときに会っているのですが、この雪で何かイベントをする話は、新潟での取材の際に話して、それはおもしろいということで、彼も非常に積極的に関与してくれました。

(大 倉)

当時、カラープランニングセンターには海上雅臣さんという方がいました。この方は後に美術評論家になり、書家の井上有一をずっと紹介し続けることになります。実は私は、海上さんからこんな話を聞いたことがあります。自分はそのとき、非常におもしろいと思って、顔料を提供することにしました。しかも自分も出かけて行って、橋の上から見たと。このイベントが、今、おっしゃったように、アサヒグラフで大きくカラーで紹介されて、GUNが県外で大きく知られるきっかけになりました。

(堀 川)

「雪のイメージを変えるイベント」の後、またメールアートをしたりして、それぞれが独自の企画で表現をするということになります。

(大 倉)

これからお話しいただく佐藤さんと関根さんは、新潟ではなくて、東京の美術学校、佐藤さんは武蔵野美術大学、関根さんは多摩美術大学で美術を勉強され、その後GUNのメンバーになられます。遅れてGUNのメンバーになったきっかけ、またGUNでどのようなことをされたのか、お話をお願いいたします。

(佐 藤)

私は大学が終わってから、先ほど前山さんが言われた東京のルナミ画廊で二人展をやったのです。私の前に前山さんがやっていたので、新潟のGUNで前山って知らないのかと聞かれて、知りませんと応えました。前山さんは何回も上京していますが、私は初めてです。その時の二人展は大学の助手の方と折半して13万円もかかりました。軽自動車100号を6万なんぼで東京へ行って帰って、もう美術は辞めたと思いました。当時1万6,000円くらいしかもらっていませんので、月1,000円か2,000円しか残らないのに、13万円をどうして返そうか、「美術なんてばかばかしい。辞めた」ということだったのです。そのとき美術手帖を見ていたら、「ニルヴァーナ展」¹⁴ というものが京都で行われることを知りました。松澤宥さんの音頭で「ニルヴァーナ 最終美術のために」、美術を捨てようというわけです。これはいいなと思いましたが、全国に事務局があるのです。宮崎、長野、そして新潟の須原で前山

¹⁴ 「ニルヴァーナ ―最終美術のために」京都市美術館（京都）1970.8.12-14 「最終美術のために」という究極的に美術を相対化するテーマを持った展覧会。

さんという人が事務局を担当しているというのです。私は隣町にいましたので、コンタクトを取り、すぐその週に行ったのです。来週、長岡でイベントをやるから行かないかと言われ、私はとにかく分からなかったのですが、不思議な世界に入り込んだという思いでした。

それから、堀川さんとも知り合うのですが、その年の70年の雪のイベントのときには、参加を促されたかも知れないのですが、冬だから参加は無理だなという話をして、春になってからはさまざまな展覧会に同行させてもらいました。「東京ビエンナーレ」¹⁵はショックでした。京都で数日、泊まって、全国から不思議な美術家が大勢集まったわけですから、暑い夏でした。京都で「ニルヴァーナ展」のついでに「万博」を見にいこうということで連れていっていただきました。すごいショックを受けて、それが今、ずっと続いているわけですから、どちらかという、ニルヴァーナが私の出発点かなというような気もしています。

その後、帰ってきてからも、雪のイベントをやったという話は聞くのですが、画像を見たこともなく、体験したことがないので、2、3年後になって、ようやく分かった次第です。今であれば、ツイッターやメールで画像などでも分かるのですが、実際、県内に居ながらにして情報は届いていなかったです。

私の「雪女郎撮影会」というのは、私は浦佐にいましたので、季節旅館を借り切りまして、全国いろいろなところに手紙を出して、雪女郎という幽霊が出るので、撮影会をやろうということ呼びかけたわけです。全国から15、6人くらいの方が集まりました。私は、食事から部屋代まで全部持ちますと、それだけやったのに、それくらいしか来なかったです。その中に、新潟在住の心霊学で有名な方が来るかと思って間違えて来られた発明王の「橋本健」という人、テレビによく出てサボテンと話をするとか、11PMとか、そういうところに出ていた日本のエジソンと言われた橋本研究所の所長が来られて、念写をやろうということで、すぐ念写をやりまして、雪の上の中で供養祭をやりました。

(堀 川)

これをよく見ると新潟GUN主催になっているね。

(佐 藤)

GUNを名乗っていたのかもしれないですね。

(大 倉)

このころは個々に活動したのもGUNの主催となっていたのですね。

(佐 藤)

それがGUNに入会じゃなくて何ですか、血判状とかそういうものもなく、ただお友達と

¹⁵ 第10回日本国際美術展「人間と物質」展（東京ビエンナーレ）。1970年5月から8月にかけて、東京都美術館を皮切りに京都市美術館、愛知県美術館、福岡市文化会館を巡回。企画構成は中原佑介。

ということで、GUNになったのでしょうかね、入GUN（乳癌）とか、そういうことではなくて。私は、結成からそれまでのGUNの活動を知らないのです。それがいつも頭の中にあるのですが、私は「GUNじゃないと思いながらGUNかな」と。そういうような活動です。これは、「夜蛾の舞」と言っています（図6）。これも私が自費で土地を借りまして、そこにカーバイドを7個、七つの星を置いて、そして夜蛾に舞をやらせようということで、全国のいろいろな美術家の方に計画書を送りつけて、舞踏指示をいただいてやったものです。



図6 佐藤秀治「夜蛾の舞」浦佐 1972.8

（堀 川）

佐藤さんは独自の企画で呼びかけたのは、71年と72年。

（佐 藤）

そんなことをして、いわゆるグループという集団活動ではなかったんです。私の場合は自主ゼミというか、個人学習といいますか。前山さん、堀川さんのところへ行けば、素晴らしい新着情報のシャワーを浴びることができ、何の情報もなかった私は、頭の中は空っぽで、すぐ染まって、今日に至ったということです。

（大 倉）

東京の大学では、そういう刺激はなかったですか。

（佐 藤）

学んだことはタブロー中心で、絵を描くということだけでした。個人的にルナミ画廊に通い詰めていましたので、そこで金坂健二のいわゆるハプニングやアンダーグラウンドシネマとか新しい美術の動向を体験吸収したりして、そこで羽永光利さんと知り合い付き合いもあ

りましたが、関心は芽生えたものの実際、自分には遠い世界と感じていました。

(大 倉)

ルナミ画廊というのは、銀座2丁目にあった貸し画廊で、現代美術系の方々が、公募展の会場などでは見られないような表現を展開されていた場所です。そこに佐藤さんは行かれて、たまたま前山さんと接触を持ったということですね。関根さんは、いつGUNに「雇った」のですか。

(関 根)

私は、多摩美で1961年に入学したのです。そのころ、読売アンデパンダンがありました。東京オリンピック前でハイレッド・センターとか、ネオ・ダダとかも私が学生時代にあったのです。私は、あまり関心がなくて、現代美術は不勉強でそれらにはまり込むことはありませんでした。学生時代は、空手部に所属していましたが、一つ下には「もの派」の関根伸夫や、それからもっと下には「美共闘」の人とか、そういう人たちがいるような時代でした。

絵描きになるとか、作家になるとか、そういう意識はあまりなくて、高等学校のときの美術教師の影響が大きいと思っています。串田良方という美術の先生がいたのだけれども、その人の授業は、天気のいい日は外へ行って写生をしてください、雨の日は石膏デッサンしてください、それだけなのです。何も教えてくれない。ほったらかしにするだけです。ただ、みんな遊んで楽なので、けっこう生徒は集まっていました。僕はそれを見て美術教師はいいなと思って、そういうものが頭の隅にありました。僕は新潟に帰ってきて中学の美術教師になりましたが、中学生に今日は写生しなさい、今日はデッサンしなさいという風には、現実にはそう簡単にはいかなかったですね。僕が勤めてから、「もの派」の連中とかがどんどん活躍しました。そして前山さんや堀川さんなども出てきましたね。1971年ごろかと思いますが、長岡で美術の研究会があって、その分科会でたまたま前山さんが近くに座ったので、話をするきっかけがあって付き合うようになった。それからずっと今日に至るまでの腐れ縁が続いているという感じですね。

そういったことで、私の表現は、現代美術をそれほどしたわけではないのだけれども、かといって公募展みたいなものはあまり向かない、自分のやりたいことをやってきました。

(大 倉)

佐藤さんはGUN主催という形で、「夜蛾の舞」や「雪女郎の撮影会」をされましたが、関根さん自身もGUNとして活動されたことはありますか。

(関 根)

画像に「発癌性イベント展」¹⁶ というものがありますね。それともう一つ、「眠り込むな！展」¹⁷ というものを大島画廊でやったのですが、いろいろな作品がありましたが、私はねずみ取りを作品として並べたり、思いつきみたいなことをやっていました。

(堀 川)

73年と74年だったと思います。次、75年ころにみんなでイベントツアーというようなことをやりました。

(大 倉)

ここには関根さん、佐藤さんとも参加されているんですね。

(堀 川)

関根さんの家に集まって、ドライブして、253号線とか353号線を十日町のほうへ行ったり、柏崎から西のほうに向かっていったり、色々しているのです。この画像は佐藤さんと北村克躬君かね。5人いますよね。私が写真係で、この人たちを下から撮っています。

(大 倉)

計画的にこれをやろうと出して出かけていったのですか。

(堀 川)

一応、どこかで場所を見つけて、ここがいいだろうというところで、特別最初からあの場所ということは決まっていなかったです。

(前 山)

プランは決まっていないです。行く先々の風景やあの洞穴をどうやったら使えるかなとか、アイデアをみんな出し合ってやっていました。

(堀 川)

人類の進化の過程みたいなものをイメージしているのです。このようなことを3、4回やっています。みんなで一斉に石を投げて、その瞬間を撮るとか。これは75年で、青海川海岸なのですが(図7)、ここに駅があります。海に一番近い駅です。次が最後で10月くらいに群馬と長野県境の白根山まで出かけて行って、今では入れないところでぶら下がってみたり、石を並べてみたりしています。2度目のときには、結構集まって2台で行ったのですけれども。

¹⁶ GUN IN TAKADA「発癌性イベント展」大島画廊(高田)1974.9.28-29

¹⁷ GUN EVENT「眠り込むな!展」大島画廊(高田)1973.12.1-2



図7 GUN EVENT 青梅川海岸 1975.8.14

(大 倉)

このTシャツは特製ですか。

(堀 川)

これは私がわざわざ品川印刷（高田）に行ってシルクスクリーン印刷で作ったのです。1着1,000円くらいで、みんなに金を出してもらって、こんなことをして喜んでいたので。次、どうするかとかはあまりありませんでした。みんなで集まって何かすれば、おもしろいアイデアが出るかなくらいだったのですが、あまり出ませんでした。でも、今になってみると、こういうことをやったことは、それなりの意味があるなと思えてくるというか、大事な記録を形成しています。

(大 倉)

駆け足で1967年から75年の軌跡を、スタートから、その後参加された佐藤さん、関根さんのお話も交えて伺いました。私が新潟に来たのは、75年から10年経った85年だったので、GUNの活動は、ほぼ収束していました。先ほど、お話が出ていた、市橋哲夫さんが同じ職場、新潟市美術館にいたこともあって、市橋さんから雪のイベントの話や、GUNの話伺ったことを思い出します。新潟という土地は、美術的にどんな環境だったか全く知らずにいましたが、先ほどの佐藤さんのお話で思い出したのは、89年ころ、新潟に「マグニチュード」

というグループ展¹⁸、東京でよく見るようなという言い方は変ですけれども、現代美術っぽい作家が随分、参加されたグループ展が何回かあって、それをたまたま見て、新潟にもこういう人たちがいるのだと驚いた記憶があります。GUNの活動は、75年で一旦終わったと考えていいと思いますが、その後も、4人のメンバーやほかの方々がときどき、一緒に何かされたりすることもあったし、またそれがきっかけになって、新潟創庫美術館¹⁹などでも、新潟の現代美術家の展示があり、また80年代には、アトリエ我廊²⁰という画廊が誕生して、そこでは前山さん、堀川さん、関根さんなどが発表されていたかと思いますが、GUN以後の10年、20年くらいのことについて、どのように新潟を見ていらしたのか。短くお話しただけでないでしょうか。

(前山)

僕らが始めた後、すぐ次の世代と一緒にやれるような状況になかったのです。僕らはどんどん老いていきますが、若い人たちとのつながりが希薄だということで、「マグニチュード展」とか「32人展」²¹等、県下の現代美術を志向する人たちみんなでグループ展をやったわけです。

(大倉)

「マグニチュード」は主催したものなのですか。

(堀川)

順序としては「32人展」が最初です。長岡で87年です。

(大倉)

それはどういう展覧会でしたか。前山さんが呼びかけされたのでしょうか。

(前山)

県下の現代美術作家に呼びかけ、32人結集した展覧会です。私だけではなく、GUNのメンバーが中心になりました。そういう意味では、GUNという名前を名乗らないで、次にスイッチをして、いわゆる継続性もあるともみえるし、断続してある意味、花開いていく、その次につなげていくような意味合いがあったと思います。そこには私たちと全然年代も違う人たちも参加していました。大ざっぱな線引きとしては、GUN展は公募団体に反発して、一匹狼でやろうという現代美術の精神でスタートしたところがありますので、既存の権威と

¹⁸ 「新潟・いま・表現 マグニチュード展」新潟市美術館（新潟）1989.3.21-26 「マグニチュード展」はその後、90、92年に長岡市美術センターで開催。

¹⁹ 「創庫美術館 点」食品会社の社屋兼倉庫であった建物を改装し、主に現代美術を扱う私立美術館として、1987年から約7年間様々な活動を展開した。

²⁰ 1977年新潟市古町のイタリア軒近くのサンビルド3階に開廊（～85年）。その後三越隣のコーリンビル2階に移転。98年からは出来島に移転し、2002年まで若手作家のインスタレーション主体の画廊として活動した。

²¹ 「私のいま・表現・新潟 新潟現代美術32人展から」長岡美術文化ホール（長岡）1987.8.5-9

か、公募団体に依存しないで、自分たちで道を切り開こうという意味合いで、32人、あるいは人数がその都度、変わりましたが「マグニチュード展」とか、そういうもので継続していったわけです。

(堀 川)

「32人展」に至ったのは、80年代に入ります。75年が終わって、次の年くらいから個々が銀座で個展をするようになります。それも3、4回で私の場合はお金もかかるしあまりやらなくなってしまったのですが、たまに長岡の霜鳥健二さんや、信田俊郎さんたちが「V.S.アート」とか言って、かっこいいような響きでやっていたのを見にいったのです。新鮮な感じを受けたのですが、その人たちとすぐつながることはなかったのです。

(大 倉)

その後の世代は、あまりグループを作るということがないですね。

(堀 川)

それがグループ活動していたのですよ。86年くらいに富山の近代美術館で公募の「日本海美術展」²²というのがあって応募するようになるのです。少し時代の雰囲気が変わってきたので、集まってもう一回やろうという雰囲気になるのです。

(大 倉)

それが「32人展」ですね。

(堀 川)

まず僕らがもう一回、4人で新潟でやる²³のです。その後に「32人展」をやりました。「32人展」をやっていたら、その後、創庫美術館ができて、しばらくの間は、創庫美術館中心みたいな動きがあります。

(大 倉)

創庫美術館というのは、87年に新潟市の駅南の長潟にできて、10年くらいあったような印象があります。民間会社が作った私立の美術館で、海苔の倉庫をそのまま使い、美術館としての設備は最小限にとどめて開館していました。ここで堀川さん、前山さんたちより、もっと若い世代で現代美術を志向する人たちを、新潟県に限らず紹介していた場所です。ちなみに今の「水と土の芸術祭」の総合ディレクターの小川弘幸さんは、多分そこで初めて美術の世界と接点を持ったのではないかと思います。

佐藤さん、関根さん、「32人展」とか「マグニチュード展」にどんな思いがありましたか。

²² 「公募・日本海美術展」 86年、89年、99年に富山県立近代美術館にて開催された展覧会。

²³ 1986年「新潟現代美術4人展」アトリエ我廊（新潟）、産業文化会館（柏崎）。87年「新潟現代美術4人展」大島画廊（高田）

(佐 藤)

ちょうど長岡現代美術館が1979年に閉館し、今は単なる展示ホールになっていますが、そのとき美術館を閉めるということで、県下の同じような表現をしている人を32人集めました。それからスタートして、今回は長岡の図書館の上に美術センターがありますが、スペース的に収まらないということでそこでやったり、新潟市美術館を借り切ってやったり、みんな自費活動ですので金銭的にもアップアップの状態でした。

(大 倉)

そのときに、私、もしかしたら美術館にいたかも知れないですね。

(関 根)

どうもグループでの全体的なことは掴めないものだから、個人的なことしか覚えていないのだけれども。

(大 倉)

アトリエ我廊で関根さんの展示を見たのが、私は初めてだと思います。「原生」というゴムを素材にした作品でした。私は関根さんがGUNのメンバーだったという知識は全然なくて、とにかく田んぼに苗を植えるようにゴムにゴムをいっぱい植えている作家さんというイメージで、堀川さんもGUNでの活動を知らずに、アトリエ我廊でスノーパフォーマンスの写真を印象深く見ました。雪原に自分で倒れ込んでその跡を写真に撮って作品にするというものでした。それが非常におもしろくて、私が89年「新潟の絵画100年展」を企画担当させてもらったときに、その出品をお願いしたことを思い出します。

もう一つ、皆さんに伺いたいのが、2000年に始まった「大地の芸術祭」についてです。恐らく想像もされなかったと思いますが、皆さんが奇しくも、雪のイメージを変えるパフォーマンスをやった信濃川の河川敷あたり一帯があのように展開していったことを、今どうお感じになっていますか。

(堀 川)

たまたま今日の朝日新聞に書籍の広告で出ていた小学館の『日本美術全集 拡張する戦後美術』第17巻配本なのですが、ここにGUNの「雪のイメージを変えるイベント」が掲載されました。歴史に残って世界的に評価されているみたいな言葉で紹介されています。結果的に先ほど前山さんのいったような話で、僕らが大地の芸術祭に参加させていただきいろいろ十日町あたりで展開するときに、一番最初にやったという話がありますが、このことなのです。後々になってくると、そんな文脈で語られることが多くなってきたということは事実です。

(大 倉)

「雪のイメージを変えるイベント」を実際に見ていたのは10人くらい。そのようなイベン

トだったわけです。そのことも、いろいろなことを感じさせますが、2000年に大地の芸術祭がスタートします。GUNを知るとのこととは別に、関根さん、堀川さん、前山さんがアトリエ我廊でされた個展を私は見ていました。3人ともものすごくお元気で、新しい発表の場があるとどんどん参加されています。今回、関根さんも「水と土の芸術祭」に参加されるなど、創作のエネルギーのすばらしさに感嘆を覚えていますけれども、大地の芸術祭から、新潟は随分、変わってきました。この辺は、皆さんどのように感じられましたでしょうか。前山さんは今、大地の芸術祭で民家を使った「ギャラリー湯山」というスペースで、若い世代の方に発表の場を提供するといった活動を展開されています。

(関 根)

大地の芸術祭では2000年の第1回に、私は仮設トイレの作品を出しました。便器は下にあるものですが、トイレを開けると便器を壁に立てて使用不可能なような状態にして。便器と言ったらマルセル・デュシャンですね。それで「デュシャンの仮設トイレ」という、デュシャンを昇華するというような感じで作ったのです。ほかにもプランを出しましたが、北川フラムさんが、これがおもしろいということで選んでもらった。そういうことが自由にできるということ、今回の「みずつち」もそうだけれども、割と自由にやりたいことを受け入れてもらえる。以前、僕はほかの展覧会に出したら全部だめだった。仮設トイレなんて、赤ふんなんてだめだとなるのだけれど、自分が思いきりやれるというところです。新潟県の現状とか、ほかの方は分からないけれども、自分がそういうことをやれる場があるということが、大地の芸術祭とか、水と土の芸術祭であると思います。

(大 倉)

佐藤さん、2000年以降の新潟はどんな時代ですか。

(佐 藤)

私は、第1回大地の芸術祭では、「大地の芸術大社」といったお宮さま的な作品を作りました。係わるようにということで、1年半前くらいから係わっていて、最終的には作品を作ってくれということで、それを松代町役場のあたりに設置しました。

その後、係わっていませんが、私は、少し違った思いがあるのです。先ほどの話の中で、私も7年くらい毎年、個展をずっと東京で、出稼ぎで発表したわけです。その後、私は考えが変わって、一つ節目として、4人で一度、グループ展をやろうとなりました。そのときのタイトルが「4つの地平」²⁴です。GUNというのは、一つの名称ですが、個々がみんなそれぞれの活動をする。一点に到達するのではなくて、「共通するある地平」を目指して4人でやっ払いこうという確認をしながらの展覧会でした。その後、私個人は「人に見せない作品」

²⁴ 新潟・現代美術・GUN'99「4つの地平」新潟県立近代美術館ギャラリー（長岡）1999

ということで、例えば「N(ネイチャー)の食卓展」と題して、守門山(すもんやま)に向かって、日本海に向かって作品を見せる発表活動をできるだけ人のいないところできるようにしました。

(大 倉)

それで私が見ていないわけですね。それをぜひ今度は守門山で見たいと思います。

今、映っているのは関根さんの、大地の芸術祭での発表作品ですね。

(関 根)

そうですね。これは(図8)、砂丘館でやったもので、ゴムや布を素材にして、2mとか、3mとか、かなり大きな作品です。



図8 関根哲男「原生」砂丘館 2012

(大 倉)

今の佐藤さんのお話はすごくシンボリックだと思います。GUNというのは何か特定の目的を持ち、それに向かって集団で行動していこうというようなことではなくて、個々のメンバーそれぞれが、関根さんがおっしゃったように、束縛のない自由な表現をいかに新潟という場所で実現できるかということ、ある意味で、実験したグループだったのではないかと今、お話を伺って思いました。堀川さん、前山さんは、最初の年から大地の芸術祭に公募されたり、非常に積極的に出品、参加されていますね。

(前 山)

長岡現代美術館ができて、地元で一番反応が悪かったのは長岡市内です。俺たちの地元を

飛び越して世界のものを持ってきたのは許せないみたいな、そういう反発がありました。大地の芸術祭にも似たような構図があって、県外や首都圏から来る人が多く、新潟県の人たちがまだ十分に咀嚼し謳歌していないというようなことを最近、感じていました。今年は、外国の方も多くなり、県内の見学者も多くなって、裾野が広がってきたのかと思います。この作品は自分にとっては、先ほどの「32人展」の鏡を3枚コーナーにを使って、そこに角材と鏡を削って、実際のコーナーが見えるというもので、立体に移行する重要な契機になった作品です。その後、大地の芸術祭を契機に、立体作品が多くなりました。

(堀 川)

これは「マグニチュード」展かな。

(前 山)

これはその後、鏡と石と角材。完全に立体、インスタレーションになっていった。これは平面ですが、これが大地の芸術祭の1回目の2000年で、真ん中の人型は、自分のシルエットを鏡の裏を削って、背中合わせにしてあります(図9)。どちら側から見ても見えます。周りには全部、風景が映ります。ちょうど写真スポットみたいになって、子どもがよく、向こうからのぞいたり、こちらで鬼ごっこをしていたのが思い出されます。

これは私にとって、その後、決定的に「視界」というテーマで取り組む契機になったもので、自分の車庫と小屋の間に隙間があったのです。そこが平面上にあるのではなくて、ねじれているのですが、そこに角材を渡したら額縁状になって、ゆがんだ隙間が見えた。そこが私には興味があって、本来、家が主役で、風景は背景なのですが、背景が主役になった。これ以降、木枠だけを画廊にはめるとか、石に一つの木枠をはめるとか、これは去年のもので、角材を大地に配して、あるいは立てる。いろいろな仕掛けで一つの風景、場を作り出すという試みです。

(大 倉)

これは、前回の水と土の芸術祭ですか。(図10)



図9 前山忠「見えざる壁」十日町市松代 第1回大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2000



図10 前山忠「日本海の視界」青山海岸 水と土の芸術祭 2012

(前 山)

そうです。動く風景を眺める仕掛けということで、作品自身を、木枠をじっと見てもあまり意味がないわけで、全体風景の中で果たす役割といたしますか、仕掛けの意味合いに、私は非常に興味があって、この十数年、視界というテーマを継続しています。

これも縦横に並べただけなのですが、真ん中だけ白く縫ってあるので、向こうの白い風景と重なって、スクリーンが一つ現れる。これは雪アートです。一昨年です。杭を使って杭アート。まあ、悔いのないようにと。

ひとことで言うと、自分の個人史だけでなく、僕らより一世代上の日本全体の戦後美術を牽引した、あるいは新しい前衛美術を切り開いた、例えば、赤瀬川原平や篠原有司男といった人たちの切り開いた地平に僕ら、次の10年、あるいは12、3年遅れの世代がずっと影響

を受けて、日本全国でいろいろなグループができました。新潟では、GUNができたわけですが、そういうもので見ると、戦後70年とは言いながらも、その地でやり抜くということの意味と、そこにある現代美術は、必ず世界や日本全体の動向と無関係ではないということを非常に痛切に感じます。

(大 倉)

ありがとうございました。堀川さんいかがですか。

(堀 川)

この作品は1968年に制作したのですが(図11)、近代美術館の「GUNの軌跡展」²⁵のときに再制作しました。当時流行の発注芸術で制作したものです。最近、こういう空間意識にフィードバックしているような感じでやっていますが、いろいろな表現をやってきました。90年代に入ってから、絵がだいぶよくなったので、21世紀からは絵を描いて、老後を過ごそうと思っていたら、再評価されたり、大地の芸術祭が始まるということで、何かもう一度、ここで一肌脱いで展開しなければならないということになっていったのです。私の場合、たまたま「雪のイメージを変えるイベント」のときに、こういうもの(雪原にふんどし姿で顔料を振りまく)を撮ってくれる人がいまして、このパフォーマンスからはじまった、これが原点だったのかなど思ったりしました。その都度、いろいろな発想をしてきて、今、かなり自分ではおもしろいことをいろいろな意味でやっているなど、ようやく自分のことを論ぜられる感じになってきました。ほんの数年前からです。それまでは、国際舞台に出たときに、あまりにも高名な人たちと並んでしまって、このままだめになって終わるのかと思っていたのですが、最近、もう少しやれそうな気がするということになっていきます。

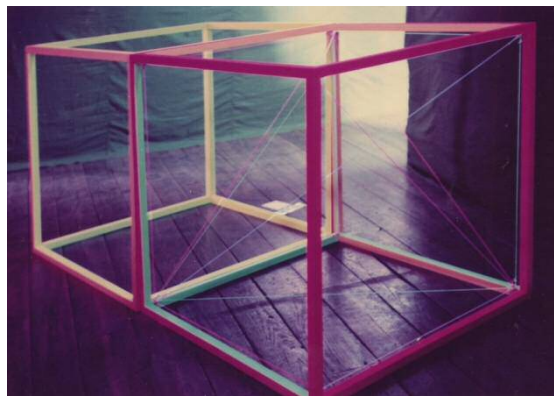


図11 堀川紀夫「SPACE」1968(現存せず。2012年新潟県立近代美術館のGUN展では再制作を出品)

²⁵ 「GUN 新潟に前衛があった頃」新潟県立近代美術館 2012.11.3-2013.1.14



図 12 堀川紀夫「The Shinano River Plan」(アポロ 11 号に因む石を送るメールアート) 1969. 7. 21

大地の芸術祭の活動が自分に刺激を与えたことと、それから 15 年も経っていますからね。2000 年に石の作品が評価されて、世界の広い舞台を見てきました。テート・モダンで、フランスの部屋にピカソが並ぶようなところで、私は東京セクションに出て、オノ・ヨーコや赤瀬川原平の隣に私の石の作品が展示されたり、その 3 年後から 6 年後くらいに、イギリスの別の会場でロバート・スミッソンの隣に僕の作品が展示されたりした。それでもまだ全然、それ以上のことをやっていないわけだからあまり思わなかったのですが、それからいろいろ活動して、こんな作品ができてきたのです。

(大 倉)

これはおもしろかったですね。

(堀 川)

まだまだ死ぬまで現代美術というのが、最近の気持ちです。

(大 倉)

ありがとうございました。2000 年以降もそれぞれの作家活動、これまでやってきたことをベースにしながらも、常に新しいものを展開しておられたというあたりが、やはり GUN の皆さんのすばらしいところだし、そういう方々が 60 年代から新潟にいたということを改めて、今日、感じました。会場からのご質問をお聞きしたいと思います。何かご質問、あるいは感想でもいいですけれども、挙手願えませんでしょうか。

(会 場)

「そして未来へ」ということが、私は一番聞きたいのですが、どういう方向性を持って、これから進んでもらいたいと思っていますか。

(前 山)

アートというのは、最後は個人、あるいは自由であるべきだと思います。GUNのグループも徒党を組むという部分で、個人でやれないエネルギーを集団でなせるという利点がありますが、こと制作に関しては、共同で何かをすとか、方向性を統一するなどということは全くないし、会則もなければ何もない。そういう面で、私も原点というのは、個人がやりたいものをやっていく。62億人いたら62億通りのアートが共存できるのだという世界を、私は自分から、自分の住んでいる地域から発信をしていく、表現していく。将来を語るとしたら、そこに可能性があると思っております。

(堀 川)

まずアートの将来性というか、未来性というのは、自分が自分の作品について、十分に認められるものを作るということです。アートは一つの意味の生成だということに気づいて、その生成という意味の文脈が非常に美しいものでなければならぬと、そのように、このごろ思います。それでやっていけば、別に個展をしなくてもいいし、観客がいなくてもいい。今は、ほとんど自分の家で、自分の庭とにらめっこしながら、そこにすごい作品ができないかなと思ったりもします。そういうことと、まだスマートフォンを使いこなしていないのですが、ポストメディアという言葉、自分でメディアを使いこなして発信するということが、メディアに美術館を作って発信をするようなことを少し、今後もそういう方向です。

(佐 藤)

私の場合は、GUNに入ったのでもなければ、外にいるわけでもない。とにかく、あのとき、例えば、前山さんの下宿で過ごした時間、あるいは長岡で石を配るイベントに参加した、その一つ一つがいわゆる「時代軸」なのです。だから、あそこに私は戻れないのですが、あそこでは何をやったか分からないけれども、今、振り返るとこういうことだったのだということは、私にとって、非常に大きな意味があるのです。ただ、それが先ほど言いましたように、GUNが集団で何かをやるということではなくて、いわゆる横でつながっていく場というか、最初のころ、とにかくお二人の話を聞いていても、ちんぷんかんぷんなのですが、また型に押し込めようということではなくて、私は、聞き流していれば、それでもよかったのかなということですが、全身で重く受け止めていました。これから、その先もやはりGUNでしかないと思います。何をやってもGUNだろうというような気持ちもありました。そういったまた10年後であると思います。同じ地平に立っていたいという気持ちです。何をやっているか分かりませんがね。

(関 根)

大分前だけでも、オーストラリアへ行って、アフリカのジンバブエに行ったときに、蟻

塚を見たのですが、3mくらいのものであるのです。あれを見たときに圧倒されまして、アートではないけれども、すごく何かを感じたのです。蟻塚的なものというか、営為そのものというか、そういうものをこれからやっていきたいと思っています。だから、美術をできるだけ離れたような、むしろ美術を離れてやるというところでしょうか。

(大 倉)

それぞれ語っていただきました。ほかにいかがでしょうか。

(会 場)

GUNの時代に、機関紙を出していらっしゃるようですが、機関紙を出す狙い、5号続いていますけれども、それを今、振り返ってみて、どう評価されていますか。

(堀 川)

私にとって機関紙というのは、宿題みたいなもので、文書を書くのが苦手で、高松次郎や赤瀬川原平とか、ああいう人たちはすごく上手い文書ですごい論理の文を書くのです。それをまねというか、爪の垢でもとらえようというくらいの気持ちだったと思うのです。あのころ書いたレポートは、全く恥ずかしくて見せたくない。でも勉強になりました。私が一応、それなりの文書を書くようになったのは、1980年くらいになって、ワープロを使うようになってからです。消したり書いたり、非常に楽になりました。

(前 山)

機関紙を出したのですけれども、今、読むと顔から火が出そうです。今読むとほとんどアジテーションビラですね。政治の文脈に近い。アートの文脈ではない。私の場合は、それと並行してステッカーや旗とか、反戦旗とか、そういうものの一つなので、ビラだけで自立して何かを表現したという印象はないのです。私自身が70年代、けっこう小西反軍闘争を契機に、政治に傾倒して行って、美術と並行という感じでしたけれども、80年にはまた軸足を美術に戻しました。そういう意味で見ると、アートと結びついたビラやアジテーションは、それなりに重要なことだと思いますが、アートから離れたものというのは、政党や市民団体が出すチラシと変わらないわけですから、別にアートでなくてもいいわけです。そのところは、独自のものを作らなければいけないと今は思っております。

(大 倉)

ありがとうございました。私も今日、初めて伺うことが多くありました。団体展と言われるものの多くは、事務局も、主たる発表も東京にあり、新潟にいてそこに属するということは、個人が東京の荘園、古代中世の荘園の住民のようなものになっていくことであり、あるいはひとつの会社に入るようなもので、一種の自由な表現ができるようでありながら、その会社の中での自由しか許されていない、という一面があると思います。そこで鍛えられていく

人もいるのかもしれませんが。しかし、そういうところから外れて、全くの、完全な個人になって、何ができるかということを経験に試み、今も持続しているのがGUNの今日の4人だったのではないかと思います。そういう方々がいて、今、大地の芸術祭や水と土の芸術祭がある。新潟の作家も、若い人たちも少なからず美術家として参加するようになりましたが、その人たちがGUNのことを知っているかいないか分かりませんが、やはり今という時代を形成する背景や土壌に、間違いなくGUNの活動があったのだなということを感じました。“癌”はなるべくかからないほうがいい病気ですが、GUNに関しては、“抗GUN剤”ならぬ“発GUN剤”を、皆さんが雪原にまき散らした粉のように、新潟にもっと吹きかけていただけると、さらに新潟がおもしろくなっていくのだろうと思います。

今日は本当に貴重なお話をありがとうございました。



■前山忠（まえやまただし） 作家、新潟現代美術家集団GUNメンバー

1944年上越市生まれ。1967年「新潟現代美術家集団GUN」を結成、新潟に前衛美術の旗を立てる。1968年「トリックス&ヴィジョン」展。1969-71年「現代日本美術展」。2012年「水と土の芸術祭」。2000～12年「大地の芸術祭」。

■堀川紀夫（ほりかわみちお） 作家、新潟現代美術家集団GUNメンバー

1946年生まれ。1967年「新潟現代美術家集団GUN」結成に参加。1970年《雪のイメージを変えるイベント》に参加。第10回東京ビエンナーレ「人間と物質」展。1983年「現代日本美術展」で受賞。1986年「日本海美術展」で奨励賞。2001年「Century City」（英、テート・モダン）に招待出品。その他「大地の芸術祭2000、09、12」など

■佐藤秀治（さとうひではる） 作家、新潟現代美術家集団GUNメンバー

1947年生まれ。1970年「新潟現代美術家集団GUN」に加わる。1972年「雪女郎撮影会」「夜蛾の舞・夜会」。1986年「日本海美術展」奨励賞。1987年、89年「日本国際美術展」。1988年「現代日本美術展」。1991年「第4回アクリラート選抜展」。2000年「越後妻有アート・トリエンナーレ2000」。2002年「Nのための食卓展」in 軽井沢、03年in 寺泊。

■関根哲男（せきねてつお） 本芸術祭参加作家、新潟現代美術家集団GUNメンバー

1942年旧満州国古北口に生まれ、1946年両親と柏崎に引き揚げる。1965年多摩美術大学油画科を卒業。以後、中学校美術教師として勤務。その間、そして現在も制作発表を続ける。主な活動として、北東アジアの現代美術「ネオ・ラグーン」（1998年県民会館）。2000年からはじまった「越後妻有アートトリエンナーレ・大地の芸術祭」には今回を含めて「赤ふん」シリーズなど5回出品。近年は「GUN新潟に前衛があった頃」（2012年県立近代美術館）にも出品。また、「原生」シリーズを中心にした個展を、東京、新潟、長岡、柏崎などで開催してきている。

■大倉宏（おおくらひろし） 美術評論家

1985～90年新潟市美術館に学芸員として勤務後、フリーとなり新潟を拠点に美術評論活動を行う。NPO法人新潟絵屋代表。砂丘館館長。長岡造形大学、新潟大学講師。著書に『東京ノイズ』（アートヴィレッジ2004）。